

価値観に
刺激を
うけよう

Session



特集
01

高知機型工業(株) / 取締役 副社長
北 泰子

特集
02

(株)堀 おかざき農園 / 代表取締役
岡崎 秀仁

特集 01

経営と向き合い、歩む

3期生 (2012年修了)

高知機型工業(株)
取締役 副社長

北 泰子



3期生の北泰子さんが土佐経営塾の面接にいらした8年前のことは、いまでもつい先日のことのように思い出されます。そのときの北さんは、「これまで中学高校で美術を教え、美術館の館長も務めてきましたが、夫が経営する会社に加わることになったので、ここで経営をしっかりと学びたい」と語ってくれました。私の記憶の中の北さんは、もちろんお若く見えはしたのですが、申込書類から実際のご年齢も拝見して、人生の後半で、「美術館長から企業経営者に転身する」という決意を感じました。そして、私自身も「その決意を微力ながら支えたい」と考えた。そんなことを懐かしく思い出した次第です。

第3期というのは土佐経営塾を高知県が運営するようになった最初の年で、20人の受講生枠に対してたくさんの方が受講を希望してくれていました。土佐経営塾には例年若手からシニアまでまんべんなく揃うのですが、3期の平均年齢は比較的若かった上に、元気のよい女性受講生が多かったこともあり、そんな受講生たちにとっては人生の先輩であり、精神的な若さにも溢れる北さんの存在感がたいへん大きかったわけです。同期の仲間たちはそんな北さんが「経営塾でどのように学ぶのだろう」と興味津々でしたし、実際に北さんからたくさん影響を受けながら学んでいました。そんなクラス運営となっていることを講師の私は見届けつつ、毎回の授業をしていたのだと思います。

今回、この“Session”で北さんをご紹介するべくインタビューをさせてもらったことで、これまで存じ上げなかったことも次々と明らかになり、私も北泰子さんへの理解を大きく深め、かつ改めることにもなりました。それをひと言で言えば、「北さんは経営塾に来る前から、実はかなり『経営』をやっていた」ということです。ここで言う『経営』とは、営利組織を運営して利益を上げるという意味においての狭義の『経営』には当たりませんが、古典文学にも時折出てくるような「成し難きを成す」という意味での広義の『経営』については、実は相当に実績豊かな方だったということです。



特集 01



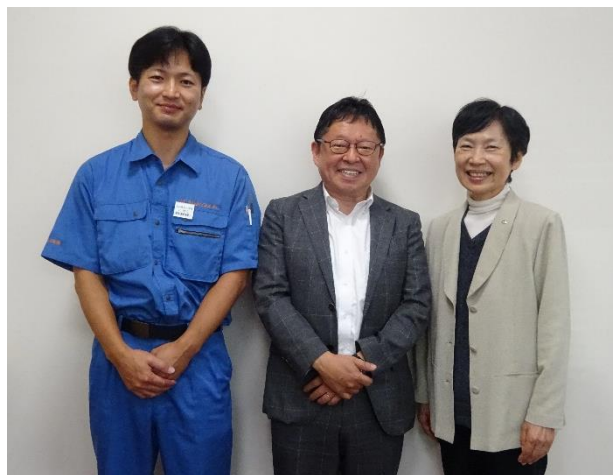
限られた紙面ゆえに、北さんから伺った興味深いお話のすべてを書き出すことはできませんが、北さんは、自分の可能性を切り開いていくキャリア開発経営の先駆者でしたし、自己実現経営の名手でもありました。また、これだけ書き残しておくべきと思うのですが、北さんは高知の公立美術館史上の重要人物であり、県内美術振興の大功労者でした。北泰子館長の美術館経営手腕は、美術という文化的側面を先導する力量はもちろんのこと、著名な芸術家や行政からの絶大な信頼も得て、また政治的な立ち回りにも秀逸であった点で、企業経営者とも十分に渡り合える水準にあったと確信します。

さて、そんな北さんではありますが、「経営」の舞台がアートからビジネスに変わったことのインパクトは、やはり相当に大きいものでした。本社の移転を契機に副社長として専従することになった高知機型工業㈱への貢献を期して、すぐに土佐経営塾の門を叩きます。北さんによれば「経営塾で学んだことは断片的でなく体系的。そして共に学んだ仲間との深く長いつながりがあり、先生とも長くお付き合いができて、何年経っても相談に乗ってもらえる。経営塾で学んだことは時を経て形になっていく」ということでした。

経営塾は4か月で終わっても、「アフターサービス期間は以外と長い」ということでしょうか。

今日までの8年におよぶ副社長業は、長くてもあと5年で終わらせたいと考えている北さん。母として、また副社長としての画策により、次男の雅之さん（現専務取締役）も経営塾に送り込んで経営の基礎を学ばせた北さんは、現社長から次期社長へのスムーズな経営継承を視野に入れ、副社長業のラストスパートに入ろうとしています。「やりたいことはまだいくらでもあるから」と静かに意気込む北さん。次は何を「経営」しようというのでしょうか。

（文：竹内伸一）



高知機型工業株式会社
〒781-5452
高知県香南市香我美町下分1244番地1
TEL 0887-50-3988
HP <https://www.nc-model-inc.co.jp>



特集 02

トマトと事業を 慈しみ育む

8期生 (2017年修了)

(株)堀 おかざき農園
代表取締役

岡崎 秀仁



8期生の岡崎秀仁さんは、春野町と大豊町の二箇所で、“LiSA TOMATO”ブランドで知られるフルーツトマト農家を営んでいます。最初は秀仁さんのお父様が営んでいたメロン農家を継ぎますが、バブルがはじけて贈答品としてのメロンの需要が低迷したことと、収穫後一週間というきわめて限られた期間の相場で年間の収入が決まってしまうという売上金額の不安定さから脱却しようと、フルーツトマト農家に転身したとのことでした。

フルーツトマトづくりの基本は親しくしていたフルーツトマト農家から学びましたが、秀仁さん自身も20年間取り組んだメロンづくりがベースです。フルーツトマトでは糖度のコントロールが重要で、甘さを出すこと自体は技術的には可能なのですが、一時的に糖度を稼いだ後は収穫量で苦労することになるため、安定的で継続的な収穫と糖度の両立が生産者としての腕の見せどころのようです。また、トマト生産のトレンドとして、炭酸ガスを用いて人工的に環境制御したトマト工場での高効率栽培が全国展開される中、3代目となる岡崎さんの息子さんがこの農法にチャレンジしますが、岡崎さんいわく、「確かに生産性は高いが、これは加工用トマトの生産手法であり、自分の目指す味にはほど遠い」のだと。岡崎さんが目指すトマトのキーワードは「酸味」であり、「酸味のあるトマトは、酸味が抜けたあとで甘さに厚みが出て、深みのある味わいになる」ということです。

生食トマトの味を探究する努力の一環として、岡崎さんは毎年の栽培テーマを決め、仮説をひとつずつ塗りつぶしながら“LiSA”ブランドを磨き続けています。そして、毎年の作品であるトマトは自らの手で、その価値を理解してくれる顧客に直接、丁寧に販売することを続けています。



特集 02



そんな岡崎さんは商人塾の修了生でもあるのですが、商人塾の修了生の間で「次は経営塾に行ってみようよ」という雰囲気になり、“LiSA”ブランドの生みの親でもある片岡印刷の片岡佐代さんを誘って経営塾に参加することになります。当時のことを振り返ってもらくと、「経営塾は相当厳しいと聞いていたので、行くなら気持ちが高まっている今しかないと思いました。でも一人で門を叩くのは心細かったんです。」「参加してみると、やっぱり考えることが多かったですね。こういうこともやっぱり必要なんだと思うことの連続でした。」「今まで会ったことのないタイプの人と同じグループになって、先生にはひたすら考えさせられる。内容がいちいち『尖って』ますよね。で、研修の帰り道の気持ちが悪い。次の授業までずっと引っかかっている。そんなことの繰り返し。」とのことでした。講師としては受講生を苦しめているつもりはないのですが、楽をさせているわけでもないということのようです。経営塾では皆さんがよく似たことを言われますので。

岡崎さんによれば、農業生産者は、土佐FBC、商人塾、土佐経営塾の順に学ぶことがお勧めだとのこと。その理由は、「土佐FBCで浅く広く概観し、商人塾で何をすればよいかの指針を得て、土佐経営塾で経営として『尖らせていく』のが自然の成り行きだから」ということでした。

実は岡崎さんは、帯屋町におかざき農園のアンテナショップとしてサラダ専門店を出店する構想を持っていました。経営塾はその実現準備の場となるはずでしたが、受講を経てその計画は凍結されることになりました。岡崎さんによれば「ケースの主人公のような人でもうまく行かなかったわけなので、考え直すことにした」のだと。

この話を聞いて、講師を務めた私は何だか少し「くすぐったい気持ち」がしました。これまでの経営塾修了生にも、同じケースで学んで出店に突き進んでいく人がいましたし、岡崎さんのように踏みとどまる人もいたと。楽観的な起業家も魅力ですが、自らの夢を厳しく自己点検できる経営者はさらに魅力的に思えるからです。

(文：竹内伸一)



株式会社堀 おかざき農園
〒781-0315
高知県高知市春野町東諸木1445
TEL 088-854-8982
HP <https://okazakinohen.com/>

同窓会だより



土佐経営塾 7 期生
同窓会幹事
株式会社パトス
代表取締役
永野 有希子

「『人が相手』を実感した経営塾」

2016年春、高知に戻った私は、美容室経営という未知の世界に飛び込みました。その夏から土佐経営塾を受講。いくつもある解を探るような授業、受講生のディベートは非常に刺激的でした。また、経営塾ではグループに分かれ課題に取り組みますが、私達グループは毎回集まって話し合いを行いました。非効率な方法だったかもしれませんが、結果的には非常に良いアイデアを生み、この経験は私の仕事のやり方を変えました。それまで美容師さんと話をしたい時は、お店の空いている時間を事前に確認して店に行く形でしたが、用事のない時でも店に行くようにしました。何度も顔を合わせるうちにプライベートな話もするようになり、仕事の話もしやすくなりました。何をするにも人が相手ということを実感しています。経営塾受講生とは修了後も定期的に会っています。今でも刺激を与えてくれる有難い存在です。

Another Story

～ 土佐経営塾を支えた人～

2013～2015年、第4～6期の土佐経営塾を担当させていただきました。

土佐経営塾では、皆さんの願書をいただいてから、人となり进行を想像してワクワクしながら夏に面接でお会いし、秋に教室へお招きし、毎週の慌ただしさとモヤモヤを乗り越えて冬に修了式を迎えます。

私にとって初年度の面接。現れた一橋MBAホルダーのK.Tさんに、竹内先生と私は「何しに来たの？」と圧迫面接をしたような気がします。一流企業の職を投げ捨てて帰郷したのだから今後の高知での活躍のステップにしてほしいと願う私の思いと、将来の土佐経営塾を託す人財と見抜いた竹内先生の期待に、今こうして応えていただいている第4期生、田村先生に感謝申し上げます。

三年目は、土佐経営塾の開催地を土佐市から高知市に移すという大きな決断をしました。ココプラが誕生するから、とはいえどちらの道もあったのです。それまで土佐市役所の皆さんの絶大なサポートにより発展してきた土佐経営塾をリセットし、さらに発展させるためにココプラで開催するのだという大きなプレッシャーの中、募集時期には、ぜひ受講いただきたいという方には直接お手紙を書き、勧誘にも行きました。そして様々なところから集まってきた個性あふれる20名の皆さんが修了された夜の懇親会。県庁生活で 後にも先にも（今のところ）初めての男泣き、それも号泣したほどに思い出の駆け巡った土佐経営塾でした。

ココプラを離れて県庁商工労働部の工業振興課で5年目となりましたが、製造業で活躍されている修了生の方々とお会いすることもあり、土佐経営塾のご縁が続いていることを実感します。面接後のグループ分けの妙など、まだまだ語り尽くせませんが、誌面の都合もありますのでこの辺にしておきましょう。

切磋琢磨という言葉がふさわしい、土佐経営塾のコミュニティ。修了生の皆さんを、また違う立場でご支援し続ける所存です。共に、頑張りましょう！



経営塾4～6期担当

岡崎 拓児

現在：高知県商工労働部 工業振興課
課長補佐

編集後記

土佐経営塾通信「Session」の第3号をお届けしました。北さんや岡崎さんへの取材、永野さんや岡崎さんからの寄稿を通して、10期にわたる土佐経営塾の歴史は、多彩な方々の“糸”によって織りなされてきたと改めて感じました。その織りなされた“布”（＝価値）を構成するのは、“タテ糸”が受講された皆さまであり、“ヨコ糸”が土佐経営塾を支えて来られた行政や事務局の皆さまです。今後は、本通信も“ヨコ糸”の一つとして機能するよう、皆さまと育てていきたいと思ひます。今後ともご協力いただけますと幸いです。

（文：田村樹志雄）